

国語部門

総評

選考の基準は、例年と違わず、着想とともに、伝えたいことを的確に表現できる力が各学年に応じ、身についているか、そのための文章構成になっているか、という点に留意しました。作品は「環境二のち（人・動物）」をテーマにしたものが目立ちました。これらに対する意識の深さが、文章にも表れていたように思われます。

今回も、原稿用紙の基本的な使い方が身についていないものが数多く見られました。また、主語と述語の関係が乱れた文や、疑問符（？）や感嘆符（！）の乱用など、基本的な表現、表記に関する不備も目立ちました。内容のよさをこれらの不備によって薄めている作品が少なくありません。日本語の力は、文章力のみならず、すべての知的活動の土台になります。日々の努力を望みたいところで、す。

賞 文部科学大臣奨励賞

弟が生まれてから

群馬県 ぐんま国際アカデミー初等部 3年 川島 大明

弟が生まれてから、はくは苦勞しつぱなした。はくが五才の時に弟が生まれた。そしたらはくのかげが、どんどんうすくなった。（中略）がまんするのは、いつだってはくだ。

「のりちゃんの事、おねがいね。」と言われれば、面どうを見ないわけにいかないじゃないか。くつをはかせたり、口のまわりをふいてやったり、ネッチョリした手をつないで、どこにも行かないように見はつてなくちゃいけない。……でもお母さんにおこられている弟は、かわいそうだ。そんな時は、自分がおこられているみたいに心ぞうがいたくなる。（中略）

「こんな弟は、もうほうつておこ。」と何度も思っただけれど、ほうつておけない。どうしてだろう。――抜粋

大明さんの表現力・観察力・感性・ユーモアは、非常に優れています。買い物の場面や牛乳の飲み方など、生活のあらゆる場面の弟とのかわりて、苦勞しつぱな「だれと、弟がいることの大切さ」に気づいた大明さん。等身大の表現に思わず口元が緩みます。

今、子どもたちには身近な家族や友人との関係を含め、他者・社会を的確に理解し「人間的に」かわる力と、それを効果的に伝える言語力が欠けています。この作品からは、大明さんの人間的な観察力や関係意識に支えられた表現の独自性と構成力、豊かさうかがえます。

賞 子どもの文化・教育研究所 理事賞

初めてのテニストーナメント

サンフランシスコ日本語補習学校 中学2年 大石 大輝

悲鳴のような叫び声が響き渡る。何事かと驚く親客がどんどん集まってきて、コートの中で試合をしている僕らの方がびくくしてしまいうほどだ。対戦相手が興奮して取り乱すのとは逆に、力では押されているはずなのに、僕は自分がどんどん冷静になっているのがわかった。（中略）

悔しいなんて思う間もなく次のボールが打ち込まれる。……来たボールを返す、足を動かして拾う……。この動作を何回繰り返したのだろうか。今でもこの試合の途中までのことは良く覚えていない。気がついた時には、「ゲームカウント、五対五」というコールが聞こえて来た。――抜粋

大輝さん本人、そして相手選手の心情が、手に取るように伝わってきます。自分との対話として「一つのボールに魂を込めること、勝ち負けより最後まで戦うことの大切さ、勝者を称える謙虚さ、相手の状況を的確に見極め判断力、プレーの構成など、テニスを通して「人生」を学び語っているところ、その表現力と内面性に、素晴らしい資質を感じさせます。

賞 社団法人日本児童文芸家協会 会長賞

「きよしこ」を読んで

千葉県 千葉県立千葉中学校 1年 宮本 奈津

「きよしこ」何となく耳になじむ響き。優しい感じのする言葉。男だろう。か。女だろう。その前に、人の名前なのだろうか。そう思いながらページを開きました。ああ、そうか。「きよしこ」は、主人公の少年きよしが勘違いした「きよしこの夜」のことなのです。（中略）

私は、器用に生きている人がうらやましく思っていました。でも、不器用にしか生きられなくなると、それでもいい、今を懸命に生きられれば、そう思える様になったのは、「きよしこ」の言葉のおかげかも知れません。――抜粋

この作品の節度ある書き方は、一見、平板に見えますが、奈津さんのやや控えめな性格と「人生と自己への正確さ・真実への素直な眼差し」からくるものです。

今、読書力は読み取った情報の意味を正確に理解・解釈し、自分の生活経験と说得力を持つて結びつけることが求められています。この両方をバランスよくまとめることは、非常に難しい文章構成力も必要です。短い文章の中で本の内容がうまくまとめられている点が高い評価につながりました。

賞 中央出版株式会社 社長賞

ベルナのしっぽを読んで

広島県 山陽女子学院中等部 3年 葛西 美波

「お母さん死ぬつてさ、ボクたちの所からいなくなつてしまふんだけれど……でも一緒に生き続けていくんだよね」これは、ベルナが亡くなるってから一年半がたったある日、郡司さんの息子幹太が言った言葉です。幹太のベルナを愛する気持ちがますます伝わってきて、私の胸を強く打ちました。（中略）

そんな素晴らしい「盲導犬をみんなが理解して、もっと視覚障害者や盲導犬が住みやすい安全で明るい社会を作っていきたい」と思っています。――抜粋

著者と盲導犬ベルナが、「人と犬」ではなく「家族」になったという理由を、著者の行動や感情の描写から正確に読み取っています。

盲導犬に対するイメージの変化から自己成長がうかがえ、社会全体が盲導犬に対して理解を深めてほしいという素直な訴え、心を打たれます。深く読み込んだうえで、文章を組み立てるその力には、常に考えてから書くこととする美波さんの姿勢が垣間見られます。

賞 優秀賞

「戦艦武蔵のさいご」を読んで

岐阜県 羽島市立森原中学校 1年 石田 聡

洗濯機から考えたこと

兵庫県 愛徳学園小学校 5年 和佐 夏希

初めてのテニストーナメント
サンフランシスコ日本語補習学校 中学2年 大石 大輝